

須崎市の 「小中学校統廃合計画」 について

土居 修

「適正規模論」と「切磋琢磨論」を錦の御旗であるかの如く振りかざし、小中学校の統廃合を強行しようとする須崎市教育委員会(以下、市教委)。怒りを通り越して、哀れさを禁じ得ない。

1973年3月7日、山原健二郎氏が衆院予算委員会第2分科会で、「12、18字級が教育学的に適正規模だといえる根拠」を糾したとき、当時の文部省初等中等教育局長は「学問的・科学的な見地から最適であるというのではなく、経験的に望ましい」としか答えられなかったという経緯を私たちは知っている。それ以降も「教育的観点から望ましい学校規模」が中央教育審議会や検討されているようだが、結論を得ることなく中断しているらしい。半世紀近く経ってもなおその基準は存在しないに等しい。にも関わらず、「適正規模論」で児童・生徒

の学習や成長が保障できるといふ市教委はみずからの不誠実さを恥じるべきではないのか。

一方の「切磋琢磨論」。須崎市小中学校統廃合計画には小規模校のデメリットとして児童・生徒が「切磋琢磨する機会が少なくなる」という文言が躍っているが、その主旨もよくわからない。

例えば、「役不足」という三字熟語。実力に比べて役割が低すぎることを示す熟語であるが、役割に比べて実力が低すぎることを誤用されることも少なくない。このままの変遷を了解しながらも、なお釈然としない感情をどこに葬ればいいのか。切磋琢磨が「しごきを削る」と同じく「仲間どうして協力しながら向上すること」と意図的に用いているとすれば、市教委の無教養を嘲笑するしかない。「切磋琢磨」の本来の意味は「学問をし、徳を修めるために、努力に努力を重ねる」という自己の修練をいうのだから、現在ではそれは誤用でないかもしれない。しかしながら、「小規模校では切磋琢磨できないのかしら」と



高教組教文部長 古畑邦明

コロナ禍に校外活動は可能か

80事業所に受け入れられてもっている。昨年度は、年度当初の臨時休校のドタバタ劇の中で早々に中止を決定したが、今年度は例年通り実施するつもりだが、コロナの第4波が県内でもじわりと広がっており、受け入れ先の確保が課題となっている。高齢者福祉施設の受け入れはまずありえない。高齢者に対するワクチン接種はまだまだ始まっておらず、5月からスタートするとしても2回の接種が終わるのはいつになるのか。政府は高齢者の接種を優先するため医療関係者も後回しに受け入れもあり得ない。保育園も子どもたちと接触が避けられない職種だけに受け入れは難しい。例年これらの生徒を受け入れても上は生徒を受け入れても入っているだけに、全員の受け入れ先を確保するのは絶望的だ。その他の職種に電話で問い合わせたところ、スーパーやレストランなどの販売・接客業も受け入れは難色を示す所が多かった。受け入れに前向きな事業所でも「現在の感染状況であれば、対策の受け入れのために日程を分けるなど

いう児童・生徒や保護者、市民の率直な疑問に市教委は沈黙を権力を用いる。なりふり構わず権力を行使し、市民を屈服させようとする姿勢は愚かしいと断じるしかない。

須崎市の義務教育は文部科学省が学校運営の課題対応に必要としている「保護者・地域住民との密接な連携」が十分に機能し、異学年との学び合いや交流学習、地域学習の実践も充実している。敢えて統合しなければならぬ根拠はない。規模の大きい学校で活躍する子どももいれば、小さな学校で伸びる子どももいる。すべての子どもを大規模校に集中させるのではなく、児童・生徒、保護者の希望によって選択できる小規模校も必要ではないのか。

昨年10月、私たちは「須崎市の教育を考える会」を立ち上げ「須崎市小中学校統廃合計画」の見直しを訴える活動を展開している。いくつかの地域での署名活動を順調に終え、現在は市内全世界に署名用紙を配布する取組を進めている。これまでの経過

して人数の制限が必要になる」とのこと、事業所に大きな負担をかけることになる。他にも「県外大学生の就労体験はお断りしているが、地元学生の希望はできるだけかなえてあげたいが」、「社員にリモートでの働き方を求めているのに、対面でのインターンシップを受け入れるのは難しい」と「面接が合わない」と、問い合わせをするたびに受け入れが困難な状況が浮かびあがった。職場見学や就労体験は学生自身の適性を知るという意味でも大切な機会だ。こうした活動は高校だけでなく専門学校や大学でも実施されているが、コロナ禍では全国的にオンラインを活用して説明を受けることくらいしかできていないという。学校と就労先の橋渡しがかまうまいかとどうかは、離職率の問題とつながっているだけに、コロナ禍の進路選択の難しさを「学校行事をコロナを理由に安易に中止にしたいくない」そんな思いでインターンシップの実施にこだわってみたいもの、受け入れ先があつた活動だけにこちらの気持ちだけではどうにもならない事があることを今更ながら思い知らされた。コロナ禍の学校行事、特に校外活動をいかに企画・運営するか、あらためてその難しさを感じている。

内8小学校を3校、中学校3校を1校)し、パブリックコメントを募集(募集期間1か月) 8月 パブリックコメントを受けて、「統合計画」(市内8小学校を5校、中学校3校を1校)の提示 10月 「須崎市の教育を考える会」を立ち上げ(以後、月一回役員会) 今年 1月 パブリックコメントの情報公開請求。4日後、非公開決定通知 3月 多ノ郷、須崎市原町・新町、新庄、浦の内地区での署名活動 4月 審査請求(異議申し立て)提出。4日後、弁明通知 ※弁明理由は非公開決定通知書記載とほぼ同じ(文言の相違のみ) 市教委の厚皮ぶりに激しい怒り 口頭で反論書提出(5月に外部委員で審議) 現在(4月) 須崎市全世界への署名用紙配布活動中。併せて、市内小中学校校長と会談中

教育の主役は子どもたちであり保護者であることは言を俟たない。家族や地域コミュニティ

定年で中村や高知市での単身赴任生活終了後、西土佐に帰って5年、何とか地域に溶け込みたいと考えました。人口減が続く西土佐地域に活動に無理のない範囲で参加できたらと思い、四万十市で唯一の道の駅の一つである道の駅「よつて西土佐」に土佐ジローの卵や野菜を出してきて、その努力(つ)が実つて、道の駅「よつて西土佐」のニュース「よつて西土佐」3月号に、菜花「つくりて写真」ご紹介してもらいました。菜花は冬の寒い時期に育ち、春近くになると蕾に米巻を閉じ込めて出荷されます。私の場合は農協に出すほどは作付けず、道の駅に出す程度で作付けです。土作りは夫がして水やりと収穫は私がやっています。今が菜花が終わり、スナップエンドウを出荷しています。(自分の好きな野菜しか作っていません) 道の駅への出荷では労働に見合うだけの金銭的な対価は得られませんが、地元地区以外の人とも交流できるようなり、私にとって大切な活動

川村喜美さん



よりすぎタイムスは道の駅「よつて西土佐」によりすぎた情報を伝える情報誌です



なはななな

星の降る小さな里 西土佐在住 川村喜美

二テイも当然それにくまわれる。しかしながら、今回の「統合計画」に教育の主役に対する基本的な教育上の配慮がどうかは知ることはできない。「統合ありき」の姿勢には須崎市における義務教育を未来にどう発展させていくかという懸望もありはしない。学校の統廃合は教育行政が一方的に進める性格のものでないはず。感慮不足はなく、現在の学級数や生徒数での教育上の課題を具体的に、総合的かつ広範な観点からの分析し、「だから」という枕詞によって教育の主役をはじめ市民に真摯に説明する必要がありはしないか。私たちはそうした努力を惜しむ強権的な市教委に「ちよっと、待ってよ」と訴えているのである。

